庭園 協会ニュース 第98号

一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301
〒 169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail : gsj20@m7.dion.ne.jp　URL : http://nitteikyou.org/

編集者：広報委員長・柴田 正文
　　委員・小沼 康子、内田 均、鈴木貴博、豊藏 均
題　字：故・上原 敬二
発行日：2019 年（令和元年）11 月 30 日

何とも不思議な増殖する有機物のような建築物

庭はみんなサグラダファミリアか？
〈三田の蟻鱒鳶ル（アリマストンビル）を訪ねて〉

中村 寛

普通建物は柱を建てたらとにかく屋根を葺いて、あとはゆっくりみたいなところがあります。このビルを訪ねた日、あいにく雨が降り出し「まっいいか。十何年建築中だし建物の中に入ればどうということはない」と、高を括って向かっておりました。着いて暗黙の了解の様な木の扉を開け中に入ったら、なんと階段を伝って水が流れ落ち、窓らしき開口部から映画のロケのように強弱をつけ雨が吹き込み、ちょっと想像できない建築中でした。オーナー建築家の岡 啓輔さんは「そっちは濡れるからこっちに寄って」と気づかって下さいましたが、私にとってはこの雨が、この魂消（たまげ）たビルを光と影の原生林に仕立て上げているかの様でした。日の光が雨粒に乗って色々な材料で型押しされた壁、天井に差し込み、其処に陰影を作る。柱はどのような構造計算に基づくのか、くねくね曲がり幾果てもなく成長し続ける植物体様。それは未完成体に向ける期待感、想像などの他、見る者の理想に近づけようとする性癖もあるかもしれないが人間が求める美の一つの方向性を表しているようにも思います（ヨーロッパでは「廃墟の美」という志向もあるようです）。現在の最上階にも登らせてもらいましたが当然屋根はなく、鉄筋が「続けるぞ」という意志を示しておりました。地下に降りました。工事用の電球がゆらぎ、岡さんの光と影が表出され、ここはまさに礼拝堂のようでした。最後に岡さんに「庭はもっと冒険してもいいかもしれませんね」と問うと、岡さん「そうですよ」とさらっと言われ、思いました。庭こそ作ってからも完成ではなく変化し続け、またそれに関わり続けることができる、まさに理想の業態ではないかと。ただしマンネリになりがちな連続作業の中で冒険心、革新、反逆というスパイスを利かすのも忘れずに、アリ・マス・トンビ・ルのように。

（監事）

第11回　庭園技術連続基礎講座の報告

2019（令和元）年5月26日～9月29日

とても刺激を受けた5回の講座

阪本 恵美子

庭園の世界観が心地好く、大名・神社仏閣庭園等見てきました。一方、住宅庭園は生活の一部であり、身近な理想郷を作れる場だと感じていました。庭を造る上で建物との関係性を知りたいと思っていたところ、「建物と庭」がテーマの当講座を知り、受講しました。第一線でご活躍されている方々のお話を伺い、手掛けた仕事を拝見でき、とても感化された5ヶ月でした。

各講師から学んだ印象に残る内容は以下の通りです。

《1回目》

●上野まゆみ氏…古民家は築50年以上のものを指す。リノベーションに際し、木材は芯が残る天然乾燥物を使用することを心掛けている。

●米山拓未氏…古民家に付随する作庭では、既存の材の再利用や古材を使用する。また古民家と庭を一体化するため築年数以上の樹齢木を植栽する。暮らしの庭であり実用性8割を意識している。

海外で日本庭園を造る場合も、材料は極力現地で調達することが重要で、素材の見極めが大切である。

《2回目》

●菅谷輝男氏……建築に対する施主様の理解を得て意識を高めるために、素材や技術の価値を伝える見学会を行っている。

庭師と対等な関係を築くことで意見交換ができ、より良いものを生み出す。

●野村光宏氏…気勢を意識し、数年経っても作庭時と変わらない植栽バランスを保つ管理が重要である。

樹を面ではなく線で捉え、株物に刈込だけでなく剪定を取入れることで景色が変わる。

米山拓未作庭の横浜市個人庭園

《3回目》

●磯守氏…施主様の要望と環境に相応しい作庭のために、変更の手間を厭わず難しい課題を乗り越えることはその場のベストにつながる。

随所に隠れた遊びがあり、手掛ける庭を楽しむ心を感じた。

《4回目》

●鈴木康幸氏…庭構成でどこに重点を置くかを地形や環境、建物の使い勝手から決定している。

修練としてガーデニングショーに出展し、そこで得たものを仕事に活用している。

●福田恵理氏…愛着を持ち長く住んで頂けるデザインを重視している。空間の快適性に照明が大きく影響を与えている。

《5回目》

●佐藤偉仁氏…茅葺の建物ごとに特徴がある。消防法の規制に負けないため、遊具や壁のデザインとして取入れる工夫や、ワークショップによる茅葺の普及活動を続けている。

浜離宮の鷹の茶屋復元では角を出す作業で苦労した。

●新肇氏…機械化されがちな現代において、時間を惜しまず手書きした図面が施主様の心を掴んだ話では、庭造りに対する姿勢や想いは人の心を動かすと感じた。

石積の中に仕掛けた水琴窟や、他からヒントを得て、奥行きのないスペースでも窓から楽しむ流れを作った話から、アンテナの張り方次第で様々な創造を生み出せると感じた。

●浜離宮恩賜庭園園長…園の歴史や変遷、現在は文献や古写真を元に管理する苦労が理解できた。

5回にわたる講座を受け、講師の方々に共通して感じたことがあります。現状で満足せず常に成長を求めていること、仕事が好きだという強い思いです。それは私の理想の姿であり、とても刺激を受けました。

今後も連続講座等でお庭の引出しを増やし、作り手の意図を思い、最善を尽くした管理を目指して頑張ります。

最後になりますが、このような学びの場を作って頂き、ご尽力頂いた皆様に感謝申し上げます。

（正会員　清澄庭園勤務）

野村光宏作庭の新宿区個人庭園

現代の造園家としての務め

營田 浩一

私は造園に出会って16年になります。自然の景を人の手で造り上げる造園の魅力を知り、多くの方にこの魅力や伝統を伝えることが造園家の使命であると思っています。私の造園会社は個人邸にこだわり、庭造りや植栽管理をしています。しかしながら日々庭を造り、管理していく中でショックだったのが、「木はいらないから管理のいらない庭にしてほしい。見栄えが悪くてもいいから木をバッサリ切ってほしい」というお客様の言葉でした。結果、庭はコンクリートで覆われ、乱雑に剪定された樹木があり、庭に対して無頓着な家庭も多いのかもしれません。そんな理由から庭造りに対して疑問を持たざるを得ませんでした。「家」があって「庭」があり、初めて「家庭」が築かれるのに、庭の良さをお客様に伝えられない造園家としての自分の未熟さを知りました。

そんな中、SNSで日本庭園協会の連続基礎講座があることを知り、同じ造園業をやっている妻と一緒に参加することにしました。改めて造園の魅力や近年のお庭の在り方など多くのことを学べるチャンスであり、何より同じ志を持つ造園家の方々にお会いできる良いきっかけになると思いました。

風薫る5月に「建物と庭」というテーマで講座がスタートしました。

今回は特に私にとって心に響いたことを述べさせて頂きます。

「古民家の再生と庭」をテーマに古民家をリノベーションし、古民家本来の魅力を残しつつ、家の良さと庭の良さを融合させた、まさに「家庭」を表現するというものでした。

特に印象に残ったのは、米山氏の家や地域に合った歴史ある材料や植物を再利用することで、その土地に合った本来の表情を魅せてくれるという考え方でした。それは私にとって再利用するという考えが、いつの間にか薄れていたことに気付かされた瞬間でした。なぜその土地に合った樹木や石があるのか、そこには必ず理由があるのだと感じました。

実地見学では、何より貴重だったのが施主様から直接お話を伺えたことです。中には同じ庭は飽きてしまうと言いながら心のどこかでは庭の表情を楽しみ、満足されている様子がとても印象的でした。

今後は限られたスペースでの庭造りが主流になっていく時代なのかもしれません。そんな中でも建物と庭というのは密接な関係を持っていると思います。建築家、庭師が手を取り合って「家」と「庭」を造り、最上の「家庭」を造り上げることが大切になってくるのかもしれません。このことを多くの方に伝えていくために精進していきたいと思います。

（一般参加　東京都在住）

磯 守作庭の八王子市永明院庭園

●第1回　5月26日（日）
〈建物と庭・建築家〉
講演…上野 まゆみ（建築家・古民家再生協会）
〈庭と建物・造園家〉
講演…米山 拓未（造園家）
〈庭園実地見学〉
個人邸（横浜市南区）案内…米山 拓未

●第2回　6月30日（日）
〈建物と庭・建築家〉
講演…菅谷 輝男（設計士・住まい塾）
〈庭と建物・造園家〉
講演…野村 光宏（造園家）
〈庭園実地見学〉
個人邸（新宿区）案内…野村 光宏

●第3回　7月28日（日）
〈建物から見た庭・庭から見た建物〉
講演…磯 守（造園家）
〈庭園実地見学〉
永明院（八王子市）案内…磯 守

●第4回　8月25日（日）
〈建物から見た庭・庭から見た建物〉
講演…鈴木 康幸（造園家）
〈庭園実地見学〉
個人邸（国立市）案内…鈴木 康幸

●第5回　9月29日（日）
〈建物と庭・建築家〉
講演…佐藤 偉仁（建築家・佐藤茅葺店）
〈庭と建物・造園家〉
講演…新 肇（造園家）
〈庭園実地見学〉
浜離宮恩賜庭園　鷹の茶屋（中央区）
案内…佐藤 偉仁

時代を超えられる豊かな庭園とは何

林 好治

連続講座に参加した理由は、講師に若い人達がいるので、若い人達の作品を見たかったこと、建築家と造園家との連携や考え方が知りたかったからです。

我々の多くは新しい庭づくりに注目しがちで、昭和、平成時代につくられた比較的新しい庭が解体されています。これは大変もったいないことと思っています。

講座の中での「手入れ（剪定）のはなし」はこれからの造園業の将来がかかっている重要な要素だと思います。奥行きのある庭、すぐれた形態の植木づくりを手入れによって維持することが出来たら、庭を少しでも長い期間残すことに繋がってくるし、何世代も続く庭の維持も可能であると考えさせられました。手入れにより庭をつくり直すことで、その価値を持ち主、或いはその後継者に庭の良さを感じてもらい繋がり続けて庭を残すことが出来るのではないかと思います。

技能、技術だけでなく施主や建築家に好まれる様な住環境になる手入れができたなら、時代を超えられる豊かな庭となるのではないかと思うのです。

創苑の庭では建築家が現存の庭を好んで建築設計を始め、出来た庭が紹介されていました。我々が建築家を、建築家が我々を刺激し合う、そして施主も造る楽しさやすばらしさを感じることができ、一緒の感動を感じることが大切だと感じました。ここで紹介された作品も多くの条件が理解された設計で施主への気遣いもあり個性的な作品が多く、一定の広さの中での立体的な構想が印象的でした。

これに続いた茅葺屋根の技の話は、浜離宮庭園で見学をし、更に魅力に取りつかれました。制作費用も聞き、庭に計画出来る可能性を感じました。早速、自庭に計画して制作したくなっています。

多くの現実や社会条件のなかで違う発想をされ努力しながらも楽しんでいる様子に高揚感をおぼえ、日本の文化の大切な一部分として庭の中に残す可能性は絶大だと感じました。

●古民家再生について

多くの新築住宅を見ていて将来性や面白さや豊かさを感じられない物件が多いです。古民家だけでなく最近の住宅でも、まだまだ使えるのに庭も家もエクステリアも全部解体され更地にして新築している物件が多いことに疑問と無駄（もったいなさ）を感じています。何件かの紹介と改造家屋を見せて頂き、私もこれをやりたいと思いました。古民家再生の建築家の発展に期待をいたします。

今、庭を改造させて頂いて感じていることは、長い間その土に根を張って生きている植物の価値、長期間そこに居た石の価値です。それらの存在が新しくした庭でも古くからの落ち着いた庭の様に仕上がることです。そしてこれらすべてを支えている土が大切だと感じています。

「少しばかりの湿った土があればいい」これは造園アカデミー会議で議長をされていた野沢清先生のお言葉です。何人かの造園家の議論の中で出した結論のようなお言葉に意味深さを感じます。

フランス・パリで日本庭園を造られた話もこれからの造園業界の将来性を感じました。同じ地球上で大変だったという話よりも楽しい経験と自信を持ったという話が印象的でした。日本の造園技術と技能は自然から学ぶことの基盤があり普遍性があり、どこの国でも庭づくりが出来ると思います。

●建物から見た庭、庭から見た建物

職人としての素直な修行と人生観も見える独特な思いの経験談は楽しく心地良く聞こえました。

永明院住職と親方との信頼感で出来上がった庭は、庭づくりにとって必要なものは何かを語っていました。

私事ですが、庭づくりと同時に土づくりの研究もしながら「庭づくりとしての手入れ」を行い、多くの家庭の庭が長く継続されるよう仕事をし続けたいと思います。

総体的に講師陣の選択や新しい試み等工夫された講座を組んで計画されていたと思いました。

学ばせて頂くことが多く実りのある講習会でした。役員の方、講師の先生方にも感謝しております。有難うございました。

（正会員　東京都支部）

鈴木康幸作庭の国立市個人庭園

国際活動委員会　海外活動報告

ジャクソンパーク修復整備

2019（令和元）年6月12日～19日

海外日本庭園修復事業に参加して

三橋 一夫

現在、明治の頃より作られてきて海外に残る日本庭園は500庭以上にも及ぶと言われる。国土交通省では外国に残されている日本庭園を再生するプロジェクトとして平成29年から日本の技術的な支援を実施し始めた。海外での日本庭園の大きな魅力は日本文化に触れ、来日するきっかけにもなる点にあるが、現実には現地の技術者達への管理・整備の技術指導や情報が十分でなかったことにより適切に維持されてこなかった庭園も多く、それらに対し現地の在外公館から修復の要望が増えてきて、2017（平成29）年に国による修復事業実施の運びとなった。

オノ・ヨーコ氏作のオブジェの中で共に働いた工事会社の皆さんと

石敷き園路を指導しながら作る

第1回目として数多くの要請の中より2つの庭園が選ばれた。カリフォルニアのグレンデールの日本庭園は「日本造園組合連合会」が、ルーマニア・ブカレストの庭園は「日本造園建設業協会」が国土交通省の要請を受け修復工事を実施した。当協会には翌2018（平成30）年2月にこの事業に参加して欲しい旨の要請があった。候補地としては、シカゴのジャクソンパーク内のフェニックスガーデンであるが、これはポートランド日本庭園の内山貞文氏が17年前に池の修復を手掛けていることもあり、ぜひ日本庭園協会にという口添えがあって決定したものである。このプロジェクトを引き受けるについて、私は5～6人のチームが1週間程度、年に一回きりの修復作業では十分なことは出来ないので、少なくとも5年位はかけて、先方が何をしてもらいたいか、また、その庭がどのような経緯を経て作られたのか、歴史的な背景があるのかを踏まえた上で、更には我々日本側としては、どこをどう手を入れたらよいのか、などを現地庭園の関係者と十分に話し合って実施すべきであるとの意向を伝えたところ、その要望が受け入れられたので、初年度は庭園の調査と先方のシカゴ公園局、庭園修復に関わっている支援者、日本総領事館の皆さん方と意見を交換した上で要望を図面化し、基本設計の全体プランを作成する作業に当ることとした。これが前年7月の事前調査であり、このために現地シカゴの日本庭園には以下の人達が集まって修復すべき個所などについて議論をした。日本より国土交通省の脇坂隆一国際緑地環境対策官、日本庭園協会の三橋一夫、アメリカ側はポートランドより内山貞文氏、シカゴ公園局のマイク・デミトリフ氏、カレン・スジャカさん、当庭園修復の支援団体代表のロバート・カー氏、工事会社よりブライアン社長と関係者が一堂に会しての討論を行い、そ

滝石組拡張工事中のメンバー達

既存の滝の後方にさらに石組を拡張した結果、奥行きのある大きな景となった

の結果をまとめたものを基に私が設計し、図面を作成することとなった。10月にはプランを終了して日米双方の関係者に検討してもらった。同時に私に同行して作業に当たって頂ける人達の人選を始めた。幸い2年前に各支部に対して海外活動に参加協力して下さる方の募集をしたところ20人程の人が手を挙げて下さったので、その中より越智將人　四国支部、池田功　東京都支部、高見紀雄　愛知県支部、星宏海　国際活動委員会の各氏に協力を求め計5人のチームを結成した。来年の実施に向け、関係各所と協議をする中で、こちらの希望としては4月に下見打合せ、6月に工事、という基本計画で進められていたのだが、シカゴ公園局に工事の申請計画を提出しその許可が必要である、という状況であった。ともかく4月には現地に行き、材料の手配、搬入路の確認など、工事に向けて具体的に決めていかねばならないので、どんどん進めて行って6月のゴーサインを待った。いろいろな条件をクリアして予定通り6月12日～19日の予定でシカゴに向けて出発した。実働5日の間の作業は滝石組の拡張、延段制作、剪定、特に今回は高木剪定を行った。作業の全体評価は極めて良かった。参加各人の技術的レベルは既に承知しているので

領事館でのレセプションディナーに招かれた。我々チームには伊藤総領事より自己紹介と庭園観を語るよう求められた

何ら心配はないが外国に行って感じるのは、地元の人と良く話し合って仕事を進めることが最も大切なことである。我々はただ工事をするために行くのではなく、技術的な指導が求められるし、自分達が思っている以上に人間的にも高く評価されていることを認識することが大切であり、それに応えられるものを残してくる気がまえが求められる。

日本庭園は今やエンターテイメントだけの存在ではなく、日本文化を伝える媒体とも言える立場に（今まで外国で頑張ってきてくれた人達のおかげで）現在はなっている。これがために今回のプロジェクトも先にあげた皆さん方のおかげで、当初の目的以上の評価が得られたと思っている。

このような海外活動は多くのボランティア精神がないと難しい。特に経済的な裏付けが重要である。ボランティアにも限度があるので、この海外での活動の系譜を切らさないように次の人達につなげていくのには確かな経済的支援が出来るようにしなければならない。これがないと全てが一時的なものに終わってしまう。幸いこのシカゴでのプロジェクトは一年毎の積み重ねが評価され、寄附金の集まり具合によってあと数年は続けられるものと思う。国土交通省の日本庭園再生事業は外国の日本庭園に対しての視野を広げていると評価されるし、今回参加して頂いた皆さんにとっては領事館でのレセプション、シカゴ市内や近辺の日本庭園の視察、共に作業した人達との交流を通じ多くの自信と誇りを得られたのではないかと思う。

一つの事業が成功するのは多くの人達の助けがあってのことです。シカゴと姉妹都市の大阪市や都市緑化機構の皆さんの助けは有難かった。関係者の皆さんに再度感謝して報告といたします。

（理事　国際活動委員長）

ディナー終了後の記念写真。誇らしい機会に恵まれ今後のプロジェクトの成功に一層の協力をと強く思った

5人のチームで得た素晴らしい経験

越智　將人

今回、国土交通省の「海外日本庭園再生プロジェクト」で、6月12日～19日までアメリカに行ってきました。

担当した場所は、アメリカ（イリノイ州シカゴ市）ジャクソンパーク内にあるフェニックスガーデンです。シカゴチームとして、日本からの庭師のメンバーは5人です。また光栄なことに、私はチームリーダーを務めさせて頂きました。

出発まで期待が日に日に増しつつも、私は海外には観光旅行の経験しかないので言葉の不安がありました。それは、「現地のガーデナーに日本庭園の本質を技術と共に伝えることが出来るだろうか？」という思いからでした。しかし、通訳の方がいたこともありますが、現地の方とコミュニケーションもとれて、本当に素晴らしい経験となりました。

シカゴに到着し、明日からの作業に向けて皆で早速現地（ジャクソンパーク）へ向かいました。現場の状況や、今回使用する石を見るためです。採石場から運んできた大量の石の中から枯滝の石組に使う石を選びました。

作業1日目、守護石を据える場所、高さ、向き、傾き等、最終的な仕上がりを考えながら据付工事作業を行いました。1キロメートル離れた集積場と現場を行き来して石を選び、また角張った石は自然にある石の形になるように加工をしました。そして枯滝石組に広がりをもたせるための石も据えました。日本の皆はもちろんですが、現地スタッフのパワーとやる気が素晴らしかったです。

頑張ってくれたおかげで、作業がとても進みました。

作業2日目、既存の延段が景観も悪く歩きづらいので改修することにしました。延段用に選んだ石ではないため、大変分厚い石でしたが、必死に作業を進めて3日の予定の石組作業を1日半で終わらせることが出来ました。

そして午後からは、樹木の剪定作業と剪定講習を行いました。その際、公園管理者のマイクさんやカレンさん達に剪定作業の手順、また透かし剪定の技術などの実演をしながら指導を行いました。

作業3日目、石組の周りに樹木下草を植えて周りにある木々の剪定作業を行いました。

作業4日目、姉妹都市の大阪市から贈られた庭門近くにある樹木へ透かし剪定を高見さんと星さんが行いました。高木のマツの枝抜き剪定は池田さんがクライミングの技術を独自に工夫した方法で行いました。今回は景観を考えて込み合う枝や、不要な下枝を切りました。

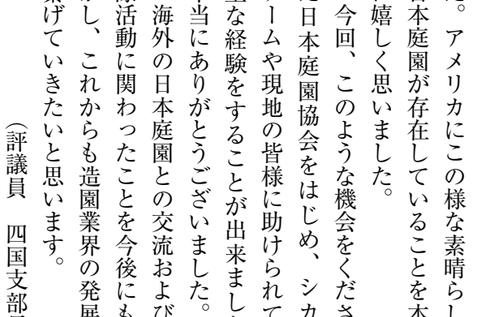
作業5日目、石組周りの仕上げ作業を行いました。そして、作業後には出来上がりを見て、達成感や充実感も沸き上り、皆で大喜びしました。

その後、イリノイ州のロックフォードにあるアンダーソン日本庭園へ見学に行きました。「北米で一番の日本庭園」と言われて人気のある庭園です。広大な敷地にある庭園は、池泉回遊式で地割や地盛りが上手でした。アメリカにこの様な素晴らしい日本庭園が存在していることを本当に嬉しく思いました。

今回、このような機会をくださった日本庭園協会をはじめ、シカゴチームや現地の皆様に助けられて貴重な経験をすることが出来ました。本当にありがとうございました。

海外の日本庭園との交流および国際活動に関わったことを今後にも活かし、これからも造園業界の発展に繋げていきたいと思います。

（評議員　四国支部長）



完成した滝を背景に国土交通省、大阪市、総領事館、シカゴ公園局と日本庭園協会５名のチーム。この他、多くの人達の協力があった

かつてあった鳳凰殿の場所にフェニックスが天上から舞い降りてきたというイメージのオノ・ヨーコ氏の作品の前で

国際活動委員会　海外活動報告

ポートランド日本庭園でのセミナー報告

2019（令和元）年6月3日～9日
曽根　将郎

アメリカ・ポートランド日本庭園において毎年開催されている日本庭園セミナーに2019年6月3日から9日までの7日間、講師として参加させて頂きました。建築家　隈研吾氏の設計で昨年新設されたトレーニングセンターを講義会場として用い、「技と心」をテーマにセミナーは行われました。

受講生は18名。学生から庭園愛好家、設計をしている方から実際に日本庭園を管理している造園家の方まで、年齢も様々、国籍もアメリカを中心にイギリス、カナダ、ホンジュラスと国際的で、日本庭園へ関心を寄せる方が世界中に数多くおられることを強く感じたセミナーでした。

茶道の稽古

講義内容は初級者向けながらも、日本庭園史から始まり各時代の庭園様式の説明、日本の文化の紹介から、造園資材や植物の生態、造園設計等と幅広く展開されました。主に午前中は講義、午後は庭園を見ながら解説を加えていく形でセミナーは進められ、座学に偏らず全身で日本文化を体感することを考慮された内容で行われました。

早朝の庭園掃除

特に興味深かったのは、「技と心」とテーマ設定されている中において〝心〟の部分をどのように伝えていけるのかを工夫されていた点でした。例えば講義の初日と最終日には茶道を通じ、路地の使い方からお茶の作法の紹介まで、異なる文化を持つ海外の方々に茶道の所作を通して日本人の気遣いについての講義を行ったり、2日目以降は庭園掃除の時間を毎朝1時間設け、清掃を通じて日常の生活習慣を正すことから庭園管理の重要性を説くなど、日本人である我々なら当たり前と感じがちな要素を敢えてカリキュラムに取り入れ、日本の〝心〟を五感に働きかけて伝えることを重要視した内容で構成されていました。「茶室に入ることさえ初めて」「こんなに庭園を掃除したことはなかった」といった声が挙がるなど、受講生それぞれが体験の中から日本の心の部分を感じ取っている様子でした。今後日本国内で造園文化を伝えていく上でも、初心に返って庭園の魅力を見直すようなアプローチが必要になっていくのかもしれないと思いました。

製図図面作成

実技作庭会場の石材店

上記のようなシチュエーションで、私が講師として任されたセミナーパートは2日間にわたり行われる基本技巧演習でした。

具体的にはメンバーを四つのグループに組分けし、近くの石材店の土地を借りて5m×5m程の広さの中で作庭を行うというもので、前日の設計授業で受講生が学んだ延段や飛石配置の知識をもとに、蹲踞と延段の施工を中心に飛石でつなぐデザイン展開までを軸に実技講習は行われました。

実技作庭の完成

まずは石材店にて作庭の材料に使用できそうな石材の選定ポイント等を指導した後、作庭箇所へ移動して昨年施工された庭園を観察した上でそれらの解体作業を行いました。その後各班で再度デザインから検討、施工に取り掛かるといった内容で演習を進めていきました。

施工の上では、丁張りのかけ方から蹲踞の役石の基本的な配置を指導し、最後はみんなで各庭を回りながら総評を行いました。デザインの範囲がある程度限られていたにも関わらず、各グループが工夫を凝らし様々な庭を作り上げる姿は、固定観念に捕われない個性あふれる素晴らしいものでした。その他、剪定のデモンストレーションを行い樹木管理する上での注意点の指導等も行いましたが、カリキュラムの中では随時質問を受け、受講生の積極性と関心の高さを改めて感じた2日間でした。

剪定講習

セミナー最終日には、受講生が講義復習や感想を発表し合う時間が設けられました。宗教観やデザイン性など講義内容にも触れながら、異文化である日本庭園を論理的に理解しようとする姿勢がある一方で、受講者からは日本庭園の印象について「自然的」と並んで「平和的」であるという意見が多く挙がり、今後平和の象徴として日本庭園がその役割を担う可能性を感じました。

最終ミーティング

今後、ポートランド日本庭園では中級者向け・上級者向けのセミナー開催も検討されているとのこと、継続的に協力をお願いしたいとの有り難いご意見も頂きました。海外において直に日本庭園の魅力を共感してもらえたこの度のセミナーは、造園業の需要や可能性をも再認識できた、私にとっても大変貴重な経験となりました。

最後になりましたが、今回のセミナー講師を担当するにあたり、準備段階よりご尽力頂きました三橋一夫国際活動委員長をはじめ、現地にてお世話になった関係者の皆様に改めて感謝するとともに、セミナーの継続開催そして日本庭園への理解・関心が世界中に広まることを願い、微力ながらも一造園家として貢献できるよう、これからも精進を重ねて参ります。（評議員　国際活動委員）

東京都支部ではテーマを《人と自然を結ぶ文化の大地》と定め本部共催で連続交歓講座を開催してきましたが、第3回のテーマを『心の豊かさと幸福とは』とし、パネラーに辰野勇氏、藤森照信氏、養老孟司氏、コーディネーターに亀山章氏をお迎えし、大手町 日経ホールで2020年2月23日（日）に開催いたします。

鑑賞研究委員会

秋季庭園見学会
『東日本屈指の庭園王国を訪ねて』

2019（令和元）年9月28日～29日

豊藏 均

畏るべし新潟の庭

日本庭園協会が、他の職能団体と大きく違うのは、作る側の会員だけでなく、一般の方々が会員になっていることです。言い方を変えれば、作る側は主観的なモノの見方や考え方をしがち、ところが一般の方々は客観的であり、自由な感性で鑑賞できるから楽しくなってきます。

このような心持ちで庭の見学会へ望んだのは、恥ずかしながら30数年ぶりかも知れません。さらに自分の感性を試すいい機会と捉えて参加させて頂きました。

貞観園全景

また、見学会への参加を決めた最大の理由は、9年前に仕事で貞観園の入口まで訪れながら春の開園前で見学が叶えられなかったからです。情緒あふれる門前までのアプローチに当たる写能阪（しゃのうはんと読み、久能山への坂道を写した意と伝えられている）を一歩一歩踏み締めるように上って貞観園が鑑賞でき、積年の悔いは払拭されました。

当日は、同園を維持管理する公益財団法人貞観園保存会（柏崎市高柳町）の代表で、ご当主の村山義朗氏のお出迎えもあり、普段では立ち入ることのできない庭の最奥部まで鑑賞できました。また、新潟の庭を広く社会へと啓蒙する「庭屋一如研究会」を主宰する藤井哲郎氏と郷土が生んだ庭匠を研究する「田中泰阿弥研究会」の三鍋光夫氏。そして本協会新潟県支部の神田松太郎・小林紀昭・藤井哲郎・若杉松男の4氏も同行して頂きました。

こうした見学会参加者と地元有志の会員との交流こそ、本協会の大きな特長の一つでしょう。

見学会はこの後、北方文化博物館（越後随一の豪農伊藤家の屋敷と庭園を一般公開）を経てホテルに到着。夜は新潟県支部の有志との懇親会で庭談義に終始し、この日の予定を無事に終えることができました。

燕喜館の庭は心が引き締まる思いを抱かせる

翌日は朝から本降りの雨の中を白山神社内にある燕喜館（豪商齋藤家の邸宅一部と庭を移築）を見学。不思議なことに我々が着くと雨は止み、それはまるで打ち水をしたように瑞々しい庭が鑑賞できたことは幸運でした。次に新潟県支部初代支部長の石川昇造氏作庭による安吾風の館（元新潟市長公舎）の豪奢な気風にあふれた庭を石川氏解説の下で見学。さらに徒歩で北方文化博物館新潟分館を経て旧齋藤家別邸を鑑賞しました。こちらの別邸と庭は、マンション建設で消滅するところを新潟県支部が保存すべきと県民に働きかけて残ったと知りました。旅の締め括りは、新潟市屈指の名料亭、行形亭（いきなりや）で昼食をした後に現地解散となりました。

私にとって最大の眼目であった貞観園、あの写能阪はもちろん、広大な庭の隅々まで掃き清めたように徹底的に掃除をされ、我々を迎え入れて下さったと知り、胸が熱くなるほど感動しました。

「掃除に始まって掃除に終わる」が作庭の基本と聞いています。また、名園の陰に人あり。「人が庭を育て、庭が人を育てる」。この掃除を3日前からされていたのが、新潟県支部のみなさんでした。畏るべしは、新潟県支部のその真心です。

（評議員　東京都支部）

記念写真に収まる一行＝安吾風の館にて

支部活動報告

石川県支部／埼玉県支部／神奈川県支部／新潟県支部

石川県支部

重量物運搬講習会

2019（令和元）年6月16日

重量物運搬講習会を終えて感じたこと

横田 宜郎

6月16日に「古来よりの技法を学ぶべし」を題材に、講師　松本清氏　宮本広之氏　両氏にみっちりご教示頂きました。

ここ石川県支部は、一昨年赤松剪定・雪吊り講習会。昨年は、版築講習会と庭木の手入れの基本、庭の骨格つくりの手法でした。今年は、作業の原点を見直す、若い世代にしてみれば原点を知る温故知新が適当な言葉ではなかろうか?と思います。

重機や機械に頼らない重量物の運搬方法を学ぶ

講習会に参加した面々

機械に頼りきりそれが当たり前の昨今、剪定でさえも空中で箱に乗り作業する時代、機械が届かないから、機械が入らないから諦める、若い世代の会話を耳にはさむことがたまにある、それではできないからか?やったことないから諦め、無難な設計になってしまうのか?これでよいのであろうか?と常々思っていました。両氏の解り良い説明、経験したことのある者しかわからない勘所無駄のない所作、コロ引きを曲げるコロの角度の決め、鉄のコロを叩くハンマーの打つ甲高い音「枠だな」と感動する私でした。

今回の講習会を通じて機械に頼らないことにより、人と人の力が合わさって行う作業の大切さ、息の合わせ方、協調性の重要さ、そして、重量物を動かすに至る材料、道具の準備、設置のしかた、経験の大切さを感じました。

物を動かすことは、とても大変で時間のかかる作業それ故にその物と接する時間が増え、見えないものが見えて石なら一石一石の据える場所が、見えてくるのだと思う反面、慎重に石を選択しなければならないのだと思いました。

この経験を活用して機械だけに頼らない柔軟な庭のデザイン設計、思い切った発想の庭創りにいかして頂きたいと思います。

（正会員　石川県支部）

埼玉県支部

『土と竹の造形』研修会

2019（令和元）年9月7日～8日

『土と竹の造形』研修会報告

石井 国義

今年度の埼玉県支部では、研修会にて土と竹の作品を作っています。大地に種が落ち、芽が出ていくようすをイメージした作品です。土で種を、竹で大地を表現しています。作品制作後、来年3月下旬からさいたま市で行われるさいたま国際芸術祭2020に出展し、多くの皆様に見て頂く予定です。

山から切り出した竹を編んで躯体を作り、埼玉県産の荒木田土に支部会員の作った稲の藁を練り込んだ荒壁土を手で打ち付け、塗りました。大直し、中塗り後、来年3月に研修会にて仕込んでおいた土佐漆喰を塗り、研ぎ出し仕上げをします。その後割り竹を編み込んで成形し、大地を手創りします。左官職人の都倉達弥氏を講師として招き、材料作りから工法まで指導を受け、土を塗り重ねています。

大地を表現する竹の造形に取り組む

種を土で表現し制作する

研修会を行うにあたり大切に思うことは、庭に関する技術的な部分を学び、実際に試してみることです。その技術的要素を使い作品を作り、形として表すような研修を心掛けています。支部役員会で提案し、話し合い、多くの会員が興味を持つような研修内容を検討し、より良い研修を目指しています。

また研修内容と同時に、研修場所を確保することも大切です。支部で行う活動を理解して頂き、その上公共性のある場所が理想です。今回は芸術祭参加の目的もあり、会場に近い研修場所の提供をJAさいたまにお願いしました。自然素材を扱い、植木生産業者も多く所属する事情もあってか、話は順調に進み、研修会の主旨をご理解頂き、快く研修場所を提供してくださいました。

今はまだ作品制作の最中です。仕事ではできないようなことを試しながらの研修のため、上手くいかない時もあります。大勢の人の手で作った力が作品に備わるよう、埼玉県支部らしく情熱を持って、来年の完成に向け研修会を重ねていきたいと思います。

（評議員　埼玉県支部長）

神奈川県支部
金綱重治先生による蹲踞及び飛石据付け研修会
2019（令和元）年9月28日～29日

一期一会を胸にきざむ

倉地 城光

今回の研修会では、東京の金綱重治先生にお越し頂き、蹲踞及び飛石据付けをご指導頂きました。茶庭、露地庭に欠かすことのできない蹲踞の据付けの極意を事細かにレクチャーして頂き、大変勉強になりました。

私自身、蹲踞の据付けを拝見するのは初めてで前石、湯桶石、手燭石などの役石がどのような順番で据付けられ、寸法がどのように決められるのかを見るだけでも勉強になりました。金綱先生は客人、亭主双方の経験を積むことで客人としての歩きやすさ、露地を見る楽しみという点に気を配るとともに、亭主としてのおもてなしの心を込めて配石しておられました。また、据付けの際には、何度も自分で前石と蹲踞の距離と高さを確かめ、使い勝手の良い最適な位置を模索しておられました。

私がこの研修会で印象に残ったことは、茶事を知らずして茶庭を造ることはできないということ、そして一石に込める思いが茶事における客人へのおもてなしにつながるということです。金綱先生は、茶庭を造ること自体を金綱先生の親方に教わったことはなく、すべてお茶の先生に教わったとのことでした。おもてなしの心を持って客人を迎える亭主と同じ気持ちで茶庭を設計することで、客人にとって使い勝手の良い露地が出来上がることを教わりました。

周囲を見ながら足許をつくる

このほかにも、決まり事の多い茶庭の中で金綱先生の作風を表現する手法も教わりました。竹林の中に茶室と露地庭を造る際、金綱先生は竹林に高低差を出しながら築山を何ヶ所か作ることで、平坦な場所に変化をつけておられました。この作業により、飛石の上に立つと周囲はうまい具合に竹林だけが見えるようになり、周りの背景が効果的に取り入れられるようになっていることがわかりました。

最後に、お茶の世界は一期一会といいますが、今回の研修会において金綱先生が選んだひょうたん型の蹲踞、景石、飛石と私たち庭師の出会いもまた一期一会だったのではないでしょうか。

（正会員　神奈川県支部）

金綱重治講師の指導のもと熱心に取り組む

新潟県支部
五十公野公園での創立30周年事業
2019（令和元）年9月20日～21日

新潟県支部創立30周年事業に至るまで

神田 松太郎

支部役員会において、令和元年度の事業計画作成の話合いの折に、支部発足30周年ということで、何か記念事業をしようという発議があり、平成2年の発足と共に取り組んだ日本庭園協会伝統庭園技塾を思い出し、会場であった新発田市の五十公野公園の現在の状態がどうなっているかを遠藤太一、猪俣俊雄、神田松太郎の3名で状態の確認に参りましたところ、現在は新発田市役所で低木の剪定だけ行われておりました。過去に剪定を支部の研修会として1回行ったことがありましたが、それ以来伸び放題になっておりました。そこで役員会にて高木の剪定を支部記念事業として行うことが決まりました。9月20日（金）21日（土）の2日間、本部から高橋康夫会長、三橋一夫理事をお招きし、初日は主に落葉樹の切り詰めを行い、翌日は清水園、菊水酒造庭園の見学会を行いました。両庭園とも郷土の誇る庭師、田中泰阿彌作庭の庭園です。支部発足と同時に開催した五十公野公園での伝統庭園技塾は創立当初からの会員にとっては思い出深き事業であり、そこで出会った講師の方々や全国各地から参加して頂いた方々との交流は今に至るも続いています。また平成17年より20年までの4ヶ年計画で高柳町（現在は柏崎市）の国指定名勝庭園貞観園の保存修理工事に参加できたのも忘れることができません。

ログハウスへ向かうアプローチは石組と石貼りの導線が絶妙

枯滝石組みのテラスへの石段は野趣豊かなリズムを感じる

その後も植栽管理を支部研修会として何度か行いつつ村山義朗ご当主との信頼関係を築き、現在、新潟県支部が指定管理者として選任されました。そして私が相談役としてご当主との打ち合わせを担当しております。

今後も地元に残る庭園を守りつつ、日本庭園協会を通して他支部との交流も深めていきたいと思っています。

（元新潟県支部長）

テラスから見た枯滝石組みはすっかり周囲の樹木が馴染んできた

30年前ここに立った吉村金男塾長の晴れやかな姿が思い出される

出展報告 2件

加藤 精一

『第5回エンディング産業展』が令和元年8月20日～22日に東京ビックサイト西2ホールで開催されました。今回の来場者数は、3日間で22,082名となった。葬儀・埋葬・供養に関する設備・機器・サービス関係が集まるエンディング産業に関する葬祭業、墓苑・霊園管理者、寺社仏閣の宗教関係者、自治体の生活衛生関連の方々が出展し商談・情報交換を行う専門展示会です。これまで、庭園関係の出展が無かったため、当協会に依頼があり、庭園に関する案内活動を行いました。次に、『第17回日比谷公園ガーデニングショー2019』が令和元年10月19日～23日開催され、昨年に引き続き、2回目となるテント出展をし、当協会の活動紹介・東日本大震災復興記念庭園の紹介・第12回庭園協会賞の紹介等を行いました。来年も出展の計画があります。会員の皆様の活動の訴求・発信の場としても、今後は活用して頂きたいと思います。

（常務理事　総務委員長）

庭園協会ニュース97号　訂正

庭園協会ニュース97号10ページに掲載させて頂いた黒森海斗さんの所属は（正会員　宮城県支部）ではなく（会員師弟　宮城県支部）でした。

これからの100年に向けての第一歩「私にとっての庭」アンケート調査結果報告

創立100周年を迎えるにあたり、会員それぞれが考える庭についてのアンケート調査を、実施いたしました。「私にとっての庭」へ寄せられたメッセージは、創立記念誌に掲載させていただきました。ここでは、それ以外の設問に関する回答について報告いたします。

（小沼 康子　理事）

調査項目

1：回答者の属性

2：庭園の魅力と理由

3：好きな庭園と理由

4：自由意見

■調査期間
2017年12月から2018年1月

■調査方式
紙面による記述式のアンケート調査。郵送で配布し、協会ホームページ、郵送、FAXにて回収。

■調査対象者と回収率
全会員（508名）に配布し、52名の方々から回答をいただきました。
回収率 10.4%

【1】回答者の属性

◆60代以上が67%を占め、若い世代の参加が待望

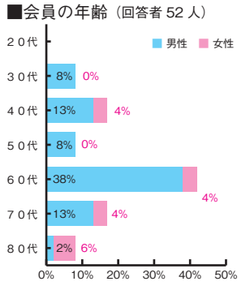
◆会員歴1～10年が多く、今後の活躍を期待

◆造園関係の他、多様な分野の会員構成を目指す

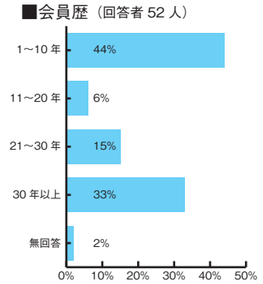
◆庭が好き、ものづくりが好き、自然や植物が好き

◆会員増は、勧誘が効果的

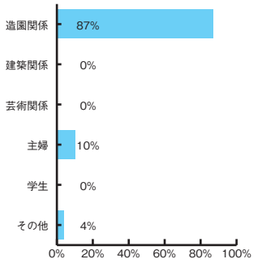
■会員の年齢（回答者52人）



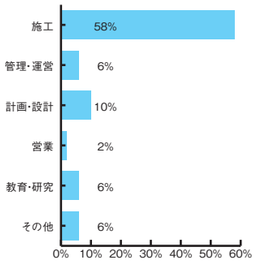
■会員歴（回答者52人）



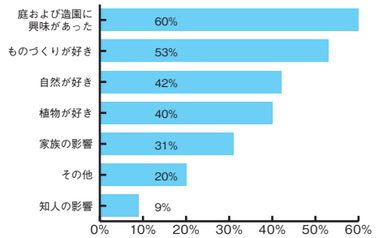
■職業（回答者52人）



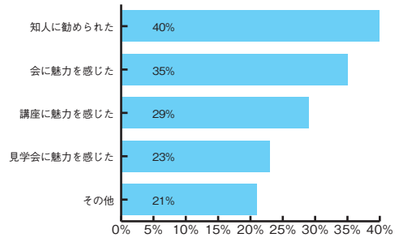
■職種（回答者45人 複数回答）



■職業選択のきっかけ（回答者45人 複数回答）



■入会の動機（回答者52人）



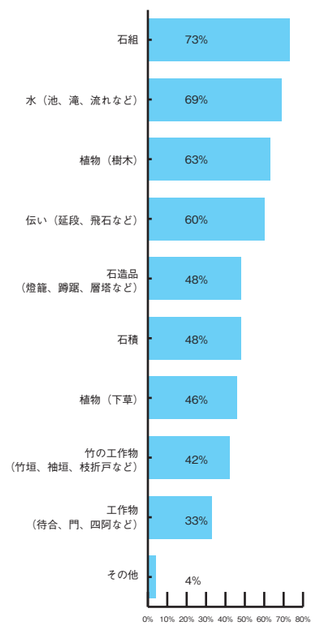
【2】庭園の魅力と理由

◆歴史やいわれ、作庭した人物など歴史・文化の魅力

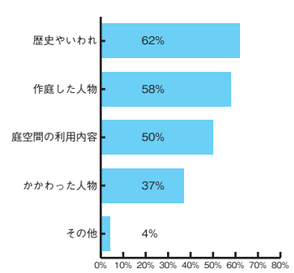
◆四季や時間による変化に心惹かれる

◆石組、水、植物、伝いなど、構成要素の魅力も幅広い

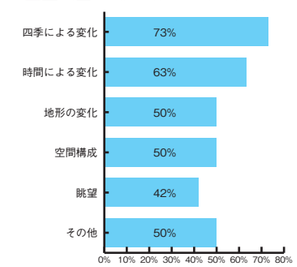
■構成要素（回答者52人 複数回答）



■歴史・文化（回答者52人 複数回答）



■空間全体（回答者52人 複数回答）



【3】好きな庭園とその理由

◆北は宮城、南は沖縄まで日本中から84庭園

◆外国からも3庭園

No. 1 桂離宮（7票）

○簡素の中に巧妙な技巧品格がある

○時代を超越した永遠の美

○建物と庭園の調和

No. 2 貞観園（5票）

○修復に関わったり、技塾で何度も訪れ、特別な思いがある

○時間が止まったような静寂

No. 3 無鄰菴（4票）

○明治期の庭、明るく、質が高い

○眺めて良し、散策して良し

No. 3 足立美術館庭園（4票）

○雄大さ

○建物からの景色

○行き届いた管理

■支持が多かった庭園

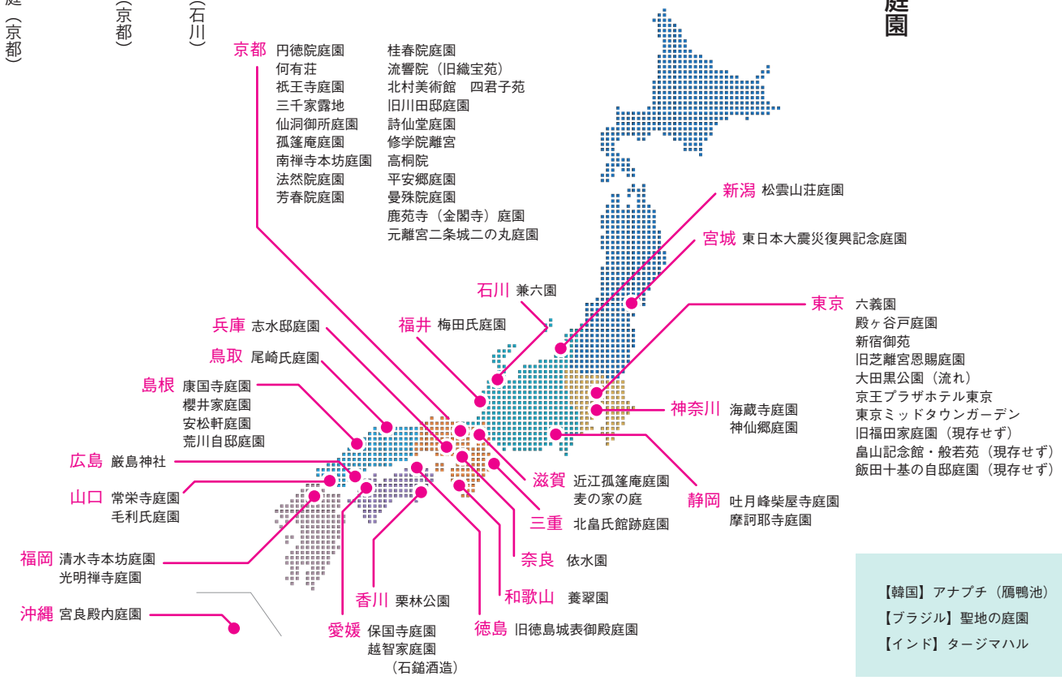
7票 桂離宮（京都）

5票 貞観園（新潟）

4票 無鄰菴（京都）、足立美術館庭園（島根）

3票 旧古河庭園（東京）、清澄庭園（東京）、小石川後楽園（東京）、竜安寺庭園（京都）、円通寺庭園（京都）

2票 毛越寺庭園（岩手）、古峯神社古峯園（栃木）、浜離宮恩賜庭園（東京）、栖雲寺庭園（山梨）、永保寺庭園（岐阜）、旧秀隣寺庭園（滋賀）、武家屋敷跡野村家庭園（石川）、西芳寺庭園（京都）、慈照寺（銀閣寺）庭園（京都）、東福寺本坊庭園（京都）、龍吟庵庭園（京都）、松尾大社盤座・上古の庭（京都）、岡山後楽園（岡山）



【韓国】アナプチ（鴨鴨池）
【ブラジル】聖地の庭園
【インド】タージマハル

【4】自由意見

自由意見では、百周年を迎えた歴史の重みを再認識するとともに今後の会のあり方についての意見が目立った。運営面では世代交代、若手や女性会員の登用による活性化や各種見学会・講座・講演会の魅力向上と記録・公開を望む声があった。さらに本会に対する海外からの期待感の高まりを受けて、国内に於いても日本庭園の認知度を高める必要性もあげられた。そのためには、「作る人」の他、「考える人」「楽しむ人」といった3層構造を意識しつつ、庭園の見方といった「鑑賞の質」の向上を求める声もあった。

今回の調査で明らかになった会員実態の一端と、寄せられた庭への想いやご意見を今後の会の運営に活かしてまいります。

編集委員コラム

木になる葉なし 14

柴田 正文

2019年5月、日本の元号が平成から令和に改元されましたが、その前後、様々な特集番組が組まれ時代の遷り変わりを確認することができました。

特にテクノロジーの技術革新とグローバリズムがもたらす影響について語られていたことが心に残りました。ユヴァル・ノア・ハラリ著の『ホモ・デウス』がベストセラーとなったことは世界の多くの人が関心を持っていることなのでしょう。AIの導入が人間の負担軽減に役立つとの意見と大幅に人が必要なくなり無用者階級を増やしてしまうという意見、バイオテクノロジーの分野でも遺伝子操作による難病治療の可能性、品種改良による生産性向上など期待される分野がある一方で、人間が神の領域に手を突っ込んでしまったのではないかという漠然とした不安感を感じるのはなぜなのでしょうか。生活を変えたテクノロジーの技術革新には負の側面もあります。平成は思考のバージョンアップができなかった時代という人もいます。玉石混交の大量の情報はインターネットという魔法の道具により、あっという間に地球を駆け巡り、問題に対処するには今や日本の中だけで考えて解決できる状況ではありません。それなのに国同士の対立は増すばかりです。人間の倫理観の確立を超える技術革新のスピードが危ういと感じることはありませんか？少し立ち止まって考えてみる時ではないでしょうか。集団入水自殺するというレミングの群れは、どうも作られた伝説であるようですが、このままグローバリズムと技術革新を制御せず、あるがままに放置していたら人間の集団入水自殺という恐ろしいことが起きないかと心配するのは思い過ごしでしょうか。脚本家の倉本聰氏はモノを作るときには根本から考え直すと言われました。また、人間は感動の共有ができる、スマホを捨て知識より知恵を使え、若者が土に触れることが大事とも発言されました。私たち庭づくりに関わる者にとって今、何が大事なのか考えてみませんか。

私たちの所属する日本庭園協会は創立時には庭園協会という名称でした。昭和元年に日本庭園協会と改称しましたが、日本庭園の協会ではなく、日本の庭園協会という意味なのです。定款にあるように庭園、公園、園芸、風致などの鑑賞と研究、維持発展に関する技術の研究と目的を幅広く定めています。日本庭園の定義は様々あるのでしょうが私は東京農業大学准教授の粟野隆先生が「古代から大陸や半島を経由してもたらされた庭園文化が日本化し、近代の西欧庭園文化も日本化していく。この何でも取り込み消化する特性が日本庭園の特質なのだ」と当協会創立百周年記念講演会で話されたものが簡潔で分かりやすいと思いました。作った人や使う素材や形式でなく、この柔軟な心と、風土になじませ、よりよいものに改良して作られたものが日本庭園というものなのだと気づくと、海外で手間とお金をかけながらも根付いている日本庭園が数多くあることも納得できます。社会のインフラストラクチャーとして認識され普遍的価値があることの証でしょう。モノを作るとき、形をまねて作っていては本当に人を感動させることは難しいと思います。技術の研修も大事ですが、その前提となる本質的な目的を探ることはさらに大事なことではないでしょうか。創立百周年を終えた今、次の百年に向け、作る人も観る人も心の整理をしてみたいと思いませんか。そこで来年2月23日(日)、講師に辰野勇氏（モンベル会長兼CEO）、藤森照信氏（建築家　江戸東京博物館館長）、養老孟司氏（解剖学者　東京大学名誉教授）、コーディネーターには亀山章氏（東京農工大学名誉教授　文化財指定庭園保護協議会会長　日本自然保護協会理事長）をお招きして「心の豊かさと幸福とは」というテーマで東京都支部主催の第3回連続交歓講座を東京 大手町の日経ホールにて開催いたします。どんなお話が聴けるのかワクワク致しますね。詳しくは同封の案内リーフレットをご参照の上お申し込みください。

編集後記

会員の皆様へのご報告です、広報委員長柴田正文は今号をもち退任致します。庭園協会ニュースの編集には第31号より、第67号よりは広報委員長として関わらせて頂きました。GSJミニニュースは創刊からNo・75まで、そして創立百周年記念誌の編集も忘れることができません。これまで長い間会務に携わることができ、皆さま方と交流がもてたことを感謝致します。次号より新たな広報委員長のもと、さらなる会員相互の情報共有と社会に向けての活動報告が充実することを期待致します。ありがとうございました。